

日本初の女性文芸評論家

板垣直子 寄贈品展



2023

五所川原市教育委員会

開催にあたって

このたび、日本初の女性文芸評論家・板垣直子氏いたがまなおこ（五所川原市湊出身。以下、敬称略）遺族のご厚意により、板垣直子が残した著作や随筆、執筆ノートなど文芸評論家として、さまざまな活動を窺い知ることができ、貴重な遺品約180点余りを当市にご寄贈いただきました。

そこで、寄贈品の中から、特に貴重な資料を展示公開し、板垣直子の文学界に果たした業績、ふるさと五所川原や母に対する愛情や思いなどを知っていただくとともに、今後、文芸評論家・板垣直子の研究が進展することを願って、寄贈品展を開催いたします。

日本初の女性文芸評論家 板垣直子

本名、平山ひらやまなを。明治29年11月18日、湊の旧家、平山家（平為家）より分家した平山吾助（平吾家）の孫、兼吉かねきちの次女として、北津軽郡栄村大字湊一現、五所川原市で誕生しました。大正12年、西洋美術評論家の板垣鷹穂と結婚し、板垣姓となりました。

西洋文学を研究し、その思想を基礎として、文芸批評や研究を行った日本初の女性文芸評論家として知られています。代表的な女性作家の文芸評論を数多く行ったほか、夏目漱石などの著述を行い、比較文学研究では島

田た謹二、吉田精一らと並ぶ存在とされています。長谷川はせがわ時雨主宰の「女人芸術」の編集委員として、林芙美子を見出しています。

また、西欧的知性と時流に動ぜぬ姿勢は、戦時下で特に光っていたと評されるように、時勢に動かされない評論活動を行ったことは特筆すべきです。

板垣直子のルーツ・平山家とは？

五所川原市湊には、代々弘前藩の広田組代官所手代を務めた平山家の住まいが残されています。当地域では最も古い住宅といわれ、廃藩当時は大庄屋でした。

平山家には代々の当主の記載による『平山日記』6冊が残されています。これは近世村方文書として史料価値が高く、当地域の近世農村社会について詳しく知ることができ、一級資料です。

『平山日記』によれば、この住宅は明和3年（1766）の地震により被害を受けたので、明和6年（1769）に主屋が再建されています。また、表門は弘前藩に対する数々の功勞により、天保元年（1830）、6代・半左衛門のときに津軽10代藩主信順公から特別に許されて建てられたことが分かっています。津軽の農民住宅としては、唯一の例です。

このように建設年代を確定できる県内でも数少ない建

造物です。また、当地域の上層農民が生活した18世紀後半の規模をほぼ原形のまま伝えていく極めて重要な建造物であることから、昭和53年（1978）1月21日に、主屋と表門が国の重要文化財に指定され、現在に至っています。

湊村と平山家

江戸時代、弘前藩の新田開発政策によって、湊村は正保2年（1645）に開発が進められて出来た村です。ちよūdō岩木川と十川が合流する位置にあり、船の往来や荷揚げなどが行われたので、湊の地名が付けられました（『平山日記』）。

平山家は湊村成立当時の移住者であり、正保3年（1646）生まれの半左衛門が湊村庄屋を務めて以来、幕末まで8代を数えます。その間、3代・孫右衛門からは広田組代官所の手代、五所川原堰奉行、大川堤奉行を務め、4代・孫右衛門以降は郷士の身分を与えられた上層農民でした。さらに6代・半左衛門以降は漆木の取調べ役である漆守や並木見継役も兼ねるなど、多くの特権を与えられていました。

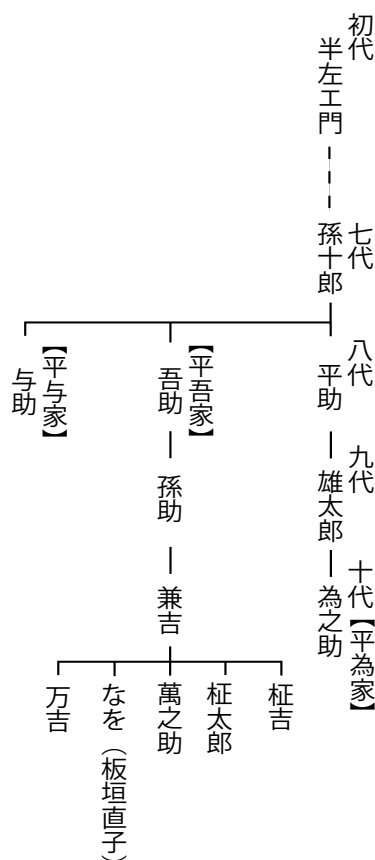
幕末の頃、8代・平助の兄弟であった吾助は、分家独立します（平吾家という）。平山なを（後の板垣直子）は、吾助の孫、兼吉の次女として、この世に生を受けました。



旧平山家住宅の主屋（上）・表門（下）（国重要文化財）

平山家 略系図

このように直子は、平山家という名家の血筋を引く人物でした。ちなみに、平山家本家10代・為之助は、直子の叔父に当たる人物です。為之助は五所川原銀行頭取、津軽鉄道社長、松木屋呉服店社長などを務める実業家であり、衆議院議員を務めた政治家としても活躍した著名人でした。



板垣直子の生涯く略年譜く

明治29年（1896）11月18日、平山兼吉けんきちの次女として、北津軽郡栄村（現、五所川原市）大字湊に生まれる。

明治43年（1910）、北津軽郡栄小学校を卒業し、同年4月、弘前高等女学校に入学する。在学中、『校友会誌』に短文や感想を寄せる。また、太宰治の姉トシが2学年上で、寄宿舎が同室となる。

大正3年（1914）、弘前高等女学校を卒業し、同年4月、日本女子大学英文科に入学する。当時、女学校を卒業して間もなく、結婚して家庭に入るといふ風潮からすると、上級学級への進学は特筆すべきことだった。

日本女子大学では英語に勤勉な学生で、外国の近代文学に興味を持った。また、阿部次郎教授からドイツ文化を背景としたゲーテの講



日本女子大学研究科時代の直子



弘前高等学校時代の直子

義を聞いて見識を高めたという。

大正7年（1918）、日本女子大学を卒業するものの、さらに研究科に籍を置いて2年間を過ごした。（※卒業前に弘前高女の校長から英語教師への誘いがあったが、断ったという。）

大正9年（1920）、東京帝国大学（現在の東京大学）文学部美術哲学科の第一回聴講生となり、美学・哲学を修める。当時、帝国大学では女性を入学させていなかったため、女性初の東大聴講生となる。男子学生に交じって美学と哲学の講義や演習に参加したことで、男性が優れているという男尊女卑だんそんじよひの考え方から解放されたという。

大正12年（1923）5月10日、最初の著書である、ゲオルヒ・グロナウ『レオナルド・ダ・ヴィンチ』を翻訳し、岩波書店から出版する①。



大正11年頃の直子

昭和5年（1930）、板垣鷹穂^{たかお}（西洋美術研究家、のち早稲田大学教授）と結婚する。夫から芸術の研究における資料の重大さ、背景をなす社会的要素の大切さを教えらるる。



大正13年、文部省在外研究員として渡欧する前の板垣鷹穂



昭和5年、結婚当初の直子（33歳）

昭和6年（1931）9月、直子にとって評論家として記念すべき評論「現今日本の女流文壇」が岩波書店の『文学』に掲載される。これ以降、『女人芸術』、『新潮』など、さまざまな雑誌等を舞台に評論を発表していく。

昭和8年（1933）2月5日、最初の文芸評論集『文芸ノート』を啓松堂から出版する②。『文芸ノート』は、これまで雑誌や新聞を主に文芸評論に行ったものを一冊にまとめたものである。直子の生涯を通じた仕事となる文芸評論の出発点となるとともに、近代文学に関する研究や評論活動が活発に行われるきっかけとなった。



昭和8年、文芸評論家としての地位を確立した頃の直子（36歳）

昭和8年（1933）、9月18日、満州事変^{まんしゅうじへん}が勃発する。

昭和12年（1937）、7月7日、支那事変^{しなじへん}（日中戦争）が勃発する。

昭和13年（1938）7月25日、『現代小説論』（第一書房）を出版する③。

昭和16年（1941）5月10日、『事変下の文学』（第一書房）を出版する④。

昭和16年（1941）6月30日、『文学建設』（高山書院）を出版する⑤。

昭和17年（1942）7月29日、『評伝樋口一葉』（桃蹊書房）を出版する⑥。

昭和17年（1942）、11月20日、『現代の文芸評論』（第一書房）を出版する⑦。

※②～⑤・⑦は、昭和文学の発生から昭和17年までのあらゆる文学現象を世界的視野と文学史の観点から捉えようとした評論で、昭和の文学史として高く評価されている。戦前では、ただ一人の女性文芸評論家として活躍する。⑥は、今日でも樋口一葉の文学を時代と文壇との史的背景の中で捉えた客観的な研究・評論として評価が高い。



昭和11年頃の直子（39歳）

昭和18年(1943)5月15日、『現代日本の戦争文学』(八興商会出版部)を出版する⑧。

昭和21年(1946)7月15日、『漱石・鷗外・藤村』(巖松堂書店)を出版する⑨。

昭和23年(1948)7月5日、『文学論』(企画社)を出版する⑩。

昭和23年(1948)8月15日、『女性の歩いたみち』(通信教育振興会)を出版する⑪。

昭和23年(1948)8月30日、『人生の探究』(吉成書房)を出版する⑫。

昭和25年(1950)6月25日、『欧州文芸思潮史』(巖松堂書店)を出版する⑬。

※⑬は日本女子大学時代からの研究成果をまとめた著書で、自からの外国文学の知識を体系つけたものである。戦後の本格的な文学研究書として重視された。

昭和29年(1954)6月25日、『婦人作家評伝』(メヂカルフレンド社)を出版する⑭。

※⑭は林芙美子や宮本百合子など昭和の代表的女性作家を取り上げ、その伝記と文学を明らかにしようとしたもの。特に林芙美子についての伝記には、自身で聞き取りに歩き、地道な努力を重ねて集めた内容で、初めて明らかにされたことが多く、林芙美子研究の第一人者と言われた。女性作家の研究が進んでいなかった当時では、

この著書の先駆的意義は極めて大きかった。

昭和30年(1955)、千葉大学文学部講師となる。※国立大学文学系の初の女性講師として話題になる。

昭和31年(1956)1月20日、『林芙美子』(東京ライフ社)を出版する⑮。

昭和31年(1956)7月25日、『漱石文学の背景』(鱒書房)を出版する⑯。

※⑯は、漱石が文学に取り入れた西洋文学を探り出し、その類似性を具体的に例証したものであり、直子の西洋文学に対する学殖をいかに発揮したものであった。

昭和31年(1956)9月15日、『平林たい子』(東京ライフ社)を出版する⑰。

昭和32年(1957)9月15日、『文学概論―古い文学―新しい文学―』(森の道社)を出版する⑱。

昭和40年(1965)2月15日、『林芙美子の生涯―うず潮の人生―』(大和書房)を出版する⑲。

昭和42年(1967)6月5日、『明治・大正・昭和の女流文学』(桜楓社)を出版する⑳。

※⑮、⑰、⑲、⑳は、女性文学に関する多数の評論を収録している。

昭和48年(1973)4月25日、『夏目漱石く伝記と文学』(至文堂)を出版する㉑。

昭和52年(1977)1月21日、逝去。80歳。



③ 『現代小説論』
昭和13年7月25日
第一書房



② 『文芸ノート』
昭和8年2月5日
啓松堂



① ゲオルヒ・グロナウ『レオナルド・ダ・ヴィンチ』 翻訳
大正9年5月10日 岩波書店



⑥ 『評伝樋口一葉』
昭和17年7月29日
桃蹊書房



⑤ 『文学建設』
昭和16年6月30日
高山書院



④ 『事变下の文学』
昭和16年5月10日
第一書房



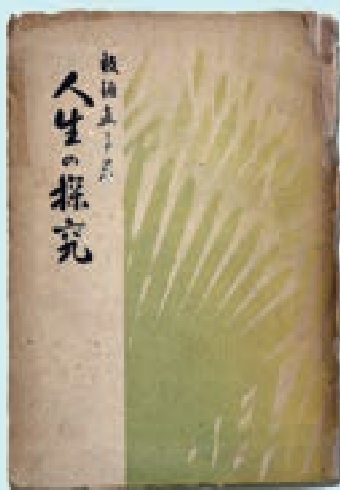
⑨ 『漱石・鷗外・藤村』
昭和21年7月15日
巖松堂書店



⑧ 『現代日本の戦争文学』
昭和18年5月15日
六興商会出版部



⑦ 『現代の文芸評論』
昭和17年11月20日
第一書房



⑫ 『人生の探究』
昭和 23 年 8 月 30 日
吉成書房



⑪ 『女性の歩いたみち』
昭和 23 年 8 月 15 日
通信教育振興会



⑩ 『文学論』
昭和 23 年 7 月 5 日
企画社



⑮ 『林芙美子』
昭和 31 年 1 月 20 日
東京ライフ社



⑭ 『婦人作家評伝』
昭和 29 年 6 月 25 日
メヂカルフレンド社



⑬ 『欧州文芸思潮史』
昭和 25 年 6 月 25 日
巖松堂書店



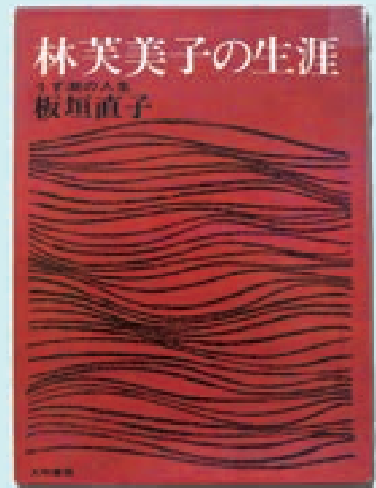
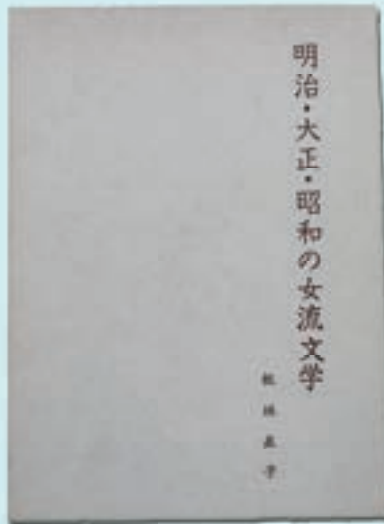
⑱ 『文学概論 -古い文学 新しい文学-』
昭和 32 年 9 月 15 日
森の道社



⑰ 『平林たい子』
昭和 31 年 9 月 15 日
東京ライフ社



⑯ 『漱石文学の背景』
昭和 31 年 7 月 25 日
鱒書房



⑲ 『夏目漱石～伝記と文学～』
昭和48年4月25日
至文堂

⑳ 『明治・大正・昭和の女流文学』
昭和42年6月5日
桜楓社

㉑ 『林芙美子の生涯～うず潮の人生～』
昭和40年2月15日
大和書房

宇野千代
「刺す」
昭和41年
新潮社



著名作家からの献呈本



瀬戸内晴美
「かの子擦乱」
昭和40年
講談社

板垣直子く生家と母の思い出く

直子の随筆「倅せだったあの頃」『母を語る 著名百人の随筆集』昭和39年（財界名古屋出版部）に、次のように生家と母の思い出を記しています。

「私の母は昭和9年の2月20日に、動脈硬化からの脳軟化症のため、64才で世を去った。今から30年近く前になる。けれども今でも終始母のことを思い出す。母の写真は一枚だけ残っている。それは私の寝室に掛かっている。日を経、年を過ぐすにつれて、なつかしい母はもうこの世では会えないのだとの思いを強くする。親のえがたさ、尊さを、今更に知ることが深い。

〈中略〉私の場合は、十分母に可愛がられた思い出をもち、それだけに母がなつかしくてたまらない。

〈中略〉母は教育はなくて、文字を知らなかった。けれども聡明なところがあり、何でもよくできた。農耕、漬物、針仕事、機織り、料理など。その上誠意をもって仕事にあたり、一日中、朝から晩まで働いていた。色が白く、鼻が高く、美しくもあった。性質はからっとして、根が善良だったから、人にも好かれた。

〈中略〉私の家は青森県津軽地方の地主で、大金持というのではなかったが、小作米を売ったお金で、一家がゆっくり暮らしをたてられた。米の仲買人が家へよくや

ってきていた。何時米を売るべきかの潮時について、母と兄が相談しあっていたり、互いに議論していたりしたのを思い出す。お米は急に売らなくても、普通なら使うお金に困らぬ質素な暮らしが、祖父の在世時代から続いたようだ。母は後妻に入り、はじめは祖父に、ついで先妻の三番目の息子で跡継ぎとなった兄に仕えて家をやっていた。『仕える』という言葉はおかしいけれども、封建的な風習の残っていた家では、この言葉はあてはまるのである。

〈中略〉生家での食事の場合を思い出す。私は母の隣に坐っている。母は自分の碗の中の魚のいい部分を、みな私の皿の中に入れてくれて、彼女自身は残り物ですましたのだ。私は喜んでそれを食べる。あの頃の東北では、肉なんか食べなかった。御馳走は鶏で、普段は専ら魚類だった。魚は豊富に使えた。小さい私は母の栄養を考えず、辞退もしなかったのである。〈中略〉



平山てる（直子の母）

板垣直子の人柄 く女性作家達への思い

直子の文芸評論『婦人作家評伝』の序に次の一文があり、直子の人柄をうかがい知ることができます。

「〈中略〉私はここに昭和年代の代表的な女流作家たちのありのままの生涯を跡づけてみて、彼女達の苦闘のいかに深かったかを追想しないではおられないのである。ことに東洋では、男尊女卑の思想が未だ根強く残っている。才能の有無の問題は別として、そのような構造の世の中に、女性が一人の社会人として仕事をしていくことに、困難が横たわっている。それ故私は、闘える女流作家達に対して、よけいに敬意と同情と親しみを感じている。〈中略〉」

女性文芸評論家としての矜持 きやうじ

「女が文芸批評家として、男の間に交じって生存してゆくことは容易ではない。男の場合には、生活の保障のないことから例え批評の仕事が貧困している際にも社会的生命をつなぐことができるが、女の文芸批評家は女の作家と違ひ、真の実力だけに遺存しなければならぬからである。『女性』ということがここでは物をいうことにはならないのである。」（『私の批評家的生い立ち』より）。

著名作家たちとの交流

昭和11年に軽井沢の追分で撮影された一枚のスナップ写真がある。直子は昭和8・9年頃から軽井沢に夏に過ごすための別荘を持っていた。戦前の軽井沢では、それほど車の交通は多くなかったが、週末ともなれば近郊へのドライブが盛んであったという。直子は追分方面にドライブをすることになり、ついでに友人たちを誘ったという。室生犀星、堀辰雄、川端康成、河上徹太郎らが招きに応じて参加したときのもので、後に著名な作家となる豪華な面々の若かりし頃の貴重な写真である。



昭和11年8月 追分にてドライブ旅行



「私の青春時代」より

私の青春時代

文芸評論家 板垣直子 (中)

高女を出る進学組の娘たちの四年生になると、イギリス文学前に、女高副、日本女子大、津の分家のようなアメリカ文学田邊が分けてきていた。私が、や、ウクトリア朝まものイキ日本女子大学をえらんだのは、リス文学に、あきたらない気持ちより自由で、より研究的な学風、ちがってきいた。型にはまっがあるが、つと想像したからだった。私がいくらの学校に入らた。しかし、十九世紀でも志にわたるでも、戸主である私が不で、その文学は、英米文学とも承知ならなければならぬが、足はに、思想的に大いに機軸したの養成した。そして、英文科がのだが、当時私たちがそこまではぞんだ。高女では英語は三年目からおられたが、私たちが十世紀に入ると、英文学も別に産田出身の先生に教えてもらった。私の学力は、「ナシ」ヨロツパの新しい文学な「ナル・リーダー」の三編でた。英文学科に入つてよたら、このアメリカの現代小説など中央の五年間の高女をた人たはずばらしい飛躍である。

ちも、意外のこと 英米文学にあきたらなくなつた。 英文科では二般 十九世紀文学には、大いに引き 教養の課程がいろ 人の若い人間として思惟問題と っばり中心は英語 いたつてもあくまで人生について の書写的な問題についても興味 であつた。丁度四年生のと

ヨロツパ大陸19世紀

—日本女子大学英文科に入学—

文学にひきつけられる

英文科に対して、文学養育の 講義が設けられ、当時重々講師 の扱いらしい面白く対面してあ っている。パイロンなんか に感服しなくなった。 そのイギリス人は、会話も 指し示していた。この時間には英 語以外の話さなかつた。彼女は ちもと秘密に聞つて「あなたは



日本女子大研究科時代の板垣氏

は必ずパイロンを止しく講義 につまづいてやりたつた、真面 目、狭心したものだった。そ の後、いろいろ面白く対面してあ っている。パイロンなんか に感服しなくなった。 そのイギリス人は、会話も 指し示していた。この時間には英 語以外の話さなかつた。彼女は ちもと秘密に聞つて「あなたは

他方英文科では、文学史の講 義をしてきたのはケンブリッジ 大学の自然科学を専ら日本 に布教の目的で来たイキリ ス人であった。彼女は職業が 宗教的な文学ばかりはめた。 「パイロン」を専ら手にし ます」といふときは、私は ひとりの感りを感して、将来自分 ましたね」といった。私の上

「ワエリー・インタレスト、イン」 ちもとがかれた成績結果が ちもとてきたりした。東中野に あつた先生の自宅にもうかが ったが、お世話になつたことに 対して謝意を述べても、先生 は絶対うけとらなかつた。 そのころはまた女子の国立大 学への入学はゆるされなかつ た。やつと専門学校卒業者を対 象にした女子の養育制度が備わ った。私も第一回生として東大文 学部に通つた。英語は大抵の人 たちができたから、英文科に集 まる者が多かつたが、私は主に 英学、哲学、その他をきいた。 講義では大塚保治教授の「欧州 文藝史」が面白く、また、 先生の美学演習(モイマン)に ちも出席した。旧制一高の卒業者 も何人かいたが、全国の旧制高 校からきた別の学生たちも、そ んなに出るものでないことを 知つた。 哲学の方は、度々本館先生 の教授時代であつた。先生の講 義をきき、哲学の演習にもで た。カントの「精神理性批判」 をつかつていたが、ここには秀 才の河野一氏が、一学生とし てあつた。当時を知る私とし て、その後の河野氏が、顧問 かりしてゐることを少しもおぼ ちもっている。

私の青春時代

文芸評論家 板垣直子 (下)

美学の研究室には、英仏独の
本が二っぱいあった。私はこ
で、時々いろいろの国語の言葉の
原書をもたたりして、視野を
ひろげた。ことに有難かったの
は、東大の美学の大塚教授、
そのころは東北大学の教授にな
っておられた岡部先生の美学書
と「七人の若き」を拝見したことだ
であった。なお、岡部先生は東大
で大塚先生の改えをあげられた
門下で、お二人とも日本におけ
るはずのすぐれた邦学書であ
る。

女子大学の時代、阿先生
からリップス後の美学
や芸術観をうつけられ
ていたのが、東大の
大塚先生の講義や演習
を通じて、もっと広い
あつさりした態度があ
りあつたこと、むしろ主
観性のかたない芸術の
わかれの嗜好が、よけいに目をひ
かと思ふようになった。女子の
かと思ふようになった。女子の
かと思ふようになった。女子の

からリップス後の美学
や芸術観をうつけられ
ていたのが、東大の
大塚先生の講義や演習
を通じて、もっと広い
あつさりした態度があ
りあつたこと、むしろ主
観性のかたない芸術の
わかれの嗜好が、よけいに目をひ
かと思ふようになった。女子の
かと思ふようになった。女子の
かと思ふようになった。女子の

一番の喜びは

東大に学べたこと

女子大学の時代、阿先生
からリップス後の美学
や芸術観をうつけられ
ていたのが、東大の
大塚先生の講義や演習
を通じて、もっと広い
あつさりした態度があ
りあつたこと、むしろ主
観性のかたない芸術の
わかれの嗜好が、よけいに目をひ
かと思ふようになった。女子の
かと思ふようになった。女子の
かと思ふようになった。女子の

であるが秋から冬にかけて、色
づつと涼しくも美しいかぎりだ
った。豊原前の校舎は、内部は
暗かったけれども、ホレンガの
ゴシック様式で、今の建物より
も、はるかにアカデミックな感
じがふかかった。
漱石の小説から名をとった三
四部曲には、言葉やゴキがう
っていたが、上の高いへりばは
散策に適し、私たちもそこに
で休息をとった。戦後の本郷界
隈は、この有名な大学があるた
りかかわらず、ひとくまひれて
る。けれどそのころの学生は
の懐かしさは、また違ったもの
であつた。私たちがたまたま
え、学生たちのよくゆく東大第
これも「四部曲」にでてくる一
や他にも軽やかなレストランが
あつて、私たちがたまたま
かけ、学生気分をたのしむたもの
だ。

そのころは、青春の感情をた
のしむたいわゆる青春文学の代
表は、何となくマイアーフ
エルスターの「アルト・ハイデ
ルベル」(一九二〇)だつた。
王子はハイデルベルグの神学
人たちが年々よくなるのを、私は
中は、普通の学生と抱かすよう
に、ゆきつげの酒場でビールを
杯を重ね、平民の顔で、愛
した。秘にもとったあとの王子

★
★
★

夏目漱石の文芸評論・研究

直子は、昭和21年、戦後いち早く『漱石・鷗外・藤村』（巖松堂書店）という評伝、作品研究を世に送り出した。さらに10年後の昭和31年、『漱石文学の背景』（鱒書房）を世に送り出した。後者は比較文学の立場から漱石の主要作品を取り上げて、具体的に西洋文学との関係を究明した著書であり、戦後の比較文学において、漱石研究の先駆的な業績と位置づけられている。

これによって、その後の研究者たちは、直子の比較文学研究に導かれ、これを批判検証することで、さらに漱石研究の進展が図られてきたのであった。これは直子の文芸評論家としての大きな功績の一つと言っても過言ではない。



寄贈品の中には、漱石についての伝記・メモ、漱石の作品、漱石研究など、漱石に関して取りまとめた直筆の大学ノートが多数残されている。

樋口一葉の文学評論

直子は、明治時代を代表する女性作家、樋口一葉ひぐちいちよう（享年24歳）について次のように評しています。

「私が一葉に一番関心しているのは、たとえば『たけくらべ』のなかに、新しい「心理描写」をしっかりと消化して用いたことである。〈中略〉

が、心理描写とは、むずかしい技術である。それゆえ、心理描写を用いたり、こなしきった作家は、その頃としては、とくに少なかった。一葉の同時代人の（尾崎）紅葉こうようにも、それと全面的にとりくんだ作品もあるが、一葉の場合はさらにしやれた形で、非常にうまくそれを用いたということが出来る。それも大人の心理の表出でなくて、性に目覚めてまだ恥じらう頃、しかも、その目覚めはどうしても表現されないでいられない時期の男女の子供たちについて描いたのだから、よけいに工夫のつんだ素晴らしい技術の勝利であると言わなくてはならない。一葉は勝気だったから、その新しい手法をどうしても試みてみて、しかもうまく成功しようと決心してかかったのだらう。そして、あれだけ文章そのものに苦心した人だったから、この方でも大いに努力して、その結果成功したのであろうが、それにしても、一葉は非常に鋭い知性をもっていた。もし、彼女が明治20年代にではなく

て、現代に生きていたとしたら、普通の女の作家たちよりも、もっと新しい問題をつかみ、新しい手法の作品をつくり、もっとはつきりとモラルを打ち出した作品を書いたかも知れないのである。」（「一葉の生き方について」より）。



『評伝樋口一葉』昭和17年7月29日、桃蹊書房。
※樋口一葉の文学を評論した板垣直子の著書。



『文芸ノート』昭和8年2月5日、啓松堂。 ※板垣直子の文芸評論の出発点となった著書。

日本初の女性文芸評論家 板垣直子～寄贈品展～

2023年1月27日

編集・発行 五所川原市教育委員会

〒037-8686 青森県五所川原市字布屋町41番地1

TEL : 0173 (35) 2111
